

14階住まいでの自然ウォッチング

私の自宅は千葉市稲毛のマンションの最上階である14階。京成線とJRに挟まれ、横を草野水路という両面鉄板護岸の水路が流れている。近くに昔の海岸線であるR14号が走り、その向こうは埋め立て地の住宅街。14階という正面をさえぎるものがない見晴らし抜群のところに暮らしており、水路には初夏になるとボラの子が上がってきて、それを狙う野鳥が来る。そうでなくとも常にコサギが1羽いて、カルガモもいるし、カワセミもやってくる。14階は水路から50m近くも高いので、双眼鏡で眺めたりもするが、ツイーという声がすると、「ああ、カワセミがやってきたなあ」と、それだけでいたい満足する。この頃は、陸化が激しいイソヒヨドリ（関西では高野山にもいるとか）もやってきて、避雷針や、運が良ければベランダの手すりに止まるといい声でさえよってくれる。今年はまだ羽毛を残した若鳥からきれいに変身した雄鳥まで見られた。声というのは下から上がってくるので、メジロの声はとにかくよく聞こえる。夏の間はセミの声に負けるが、それが落ち着くと、チュルチュルと、あの小さい体でよく大きな声を出せるものだと思いますながら聞いている。モズの声聞こえるようになると、秋だなあ・・・と。

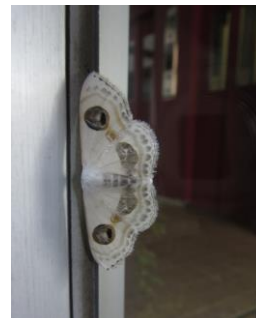


水路が向かって上側にぶつかるところが京成線 ←



去年はカルガモがたくさんの子育てをしていた。ヒナから幼鳥くらいになると、親子が水路で採餌に訪れるので、橋から眺める人の話題にもなったが、今年の子育てが見られなかった。カルガモの子育ての頃にはそばの公園のヒマラヤスギでハシブトガラスも子育てをすることが多く、その時期が重なると、カルガモのヒナの数も日ごとに減っていく。一昨年などは、9羽がいたのがゼロになり、6月の後半にもう一度子育てをしたくらいだ。今年カルガモが子育てをしなかったのは、水路に張り出していたシナサウグルミの木が伐採され、上空から見通しがよくなりすぎて隠れる場所がなくなったからではないかと思う。ちょっとした環境の変化を生き物は微妙に感じ取るのだろう。

真横が水路ということで、野鳥だけでなく、春になると夕闇の中アブラコウモリが飛び回る。一度、知らないうちに家の中に入っていたこともあった。去年はマンションのエントランス横の植え込みで死んでいた。原因はわからない。お掃除のおばさんが枯葉？と思うくらいの目立たなさだった。ふだんはきつとマンションのどこかすき間で暮らしているのだろう。



気を付けるようになった。虫仲間が、「蛾のマンションね」というくらい、冬季を除いていろいろと蛾を見かけるので、「今日はなんという蛾がいたよ」とメールで報告するくらい、様々な蛾を中心とした虫がやってくる。(昨年も今年もやってきたきれいどころが、フタツメオオシロヒメシャクという蛾、開帳わずか3cmほどだが・・・) 毎朝玄関ドアをそっと開けて、外の壁に「何かいないか」、ゴミ捨てに階下まで下りると、エントランスなどに「虫がいないか」と、目はいつも虫を探してしまう。見つけてもゴミ捨ての時は、カップレンズもカメラも持っていないので、自宅に一旦取りに戻ったり、素手で捕まえたりして、なんという蛾なのか確かめるのも楽しみのひとつ。3日続けて何もいないということは、まずない。蛾がいなくても、夏中天井にはクサカゲロウの仲間がくっついていて、コメツキやコガネムシなどもある。小さなアジアイトトンボが13階にいたこともあるが、ベランダからはウスバキトンボの強い飛翔も見られるし、水路で一斉に羽化するアキアカネが植栽にたくさん見られる年もある。今年は、そんなアキアカネも見られず、わずか、コノシメトンボ1頭が植栽のてっぺんに止まっていたくらいだ。シオカラとギンヤンマは毎年水路にいるが、年によってはチョウトンボがいたりする。

今年はベランダに立派なノコギリクワガタに、カブトムシのオスもやってきた(例年はせいぜいコクワガタだけ)。スズメバチがベランダにいることもあったりする。秋にはオスが出るので、触覚が長いとオスかなと、皮手袋をはめて捕まえ、確認したりしたが、今年はスズメバチもアシナガバチもあまり見ない。アシナガバチといえば、初夏にセグロアシナガバチが、ゴミ置き場近くの掃除道具を入れる小部屋の天井に巣作りをし始めたので、何日か見ていたが、やはり気付かれ撤去されてしまった。危険なハチの巣を放置しておくはずはないと思いつつ、やはり残念だった。たまたまセグロアシナガバチはおとなしいらしいということ、自分の部屋でセグロアシナガバチを飼っていたという人の本(「アシナガバチと暮らした夏(甲斐信枝)」)を読んで、そうかなと思った後だったので、なおさら目が行ったのだった。

その後、小雨の日に同じゴミ置き場そばを歩いていて、おやっと思っで見つけたのが、セアカゴケグモだった。まさかと思いつつ確認のためにカップレンズを取りに帰って捕まえたら、間違いなかった。一時期騒がれたけれど、最近はあまり話題に上らない。毒性も小さいらしいし、管理人さんにいうほどではないと思った。いったいどこから飛んできたのかと思ったが、けっこうどこにでもいて、気づかれないだけなのではないだろうか。ヒアリだったら大変だけど・・・。

クモというと、レッドリストに入っているキシノウエトタテグモが、マンションの庭のどこかに住んでいるようなのだ。毎年メスを見かけるのだが(例えばエントランスの天井に張り付いているとか)、今年は秋に出るというオスが外壁にいるのを偶然見かけた。一見、黒いゴミにしか見えない。レッドリストに載っているとはいえ、近くのスーパーの階段でもメスは見かけたことがあり、見かけてもそれだと気づいて報告する人がいないだけ、なのではないかと思う。

夏が終わり、あっという間にセミの声が聞かれなくなってきたが、20年近く前からクマゼミが近くで鳴くようになった。クマゼミは温暖化のせいというより、植栽の土に幼虫がついてきて、関東も暖かいのでそのまま冬越して居つくようになったのだと思う。発生が局所的で、同じ千葉市でもジャージャーという独特の鳴き声を全く聞かないという人もいるからで、セミの行動範囲はそう広くないのではないかと。クマゼミは、声はすれどもなかなか成体にも抜け殻にも出会えないセミだが、マンションそばの公園で抜け殻も死骸も見つけたので、公園が作られた時の植栽の土についてきたのではないかと思う。

クマゼミに限らず、セミは野鳥の若鳥にとってのご馳走になっている気がする。7月頃隣の公園に朝行くと、カラスやムクドリが地面近くで何か捕まえていた。見ると口に咥えているのはセミだった。羽化したばかりで、まだあまり飛べないセミのかなりの数が雑食のカラスなどの餌になっているのだろう。それでなくともうるさく鳴くセミの声だ、食べられることがなかったら、夏がどれほどうるさくなるだろうかと、ふと思ったりした。

涼しくなったこの頃は、夕暮れ時にそばの京成土手近くに、カンタンやヒロバネカンタン、クマスズムシの声を聞きに出かける、今年も鳴いてくれたのね、と。

イイギリにヒヨドリ

赤い木の実が多いのは果実食の鳥の目に付き易い為、真っ先に食べられて種子散布してもらうのに有利と言われます。この事に特に疑問を抱かずあーそうかと思っていました。

ところが実際に野鳥観察をしていると、目立たない褐色の実や黒い実も結構食べている場面を見ます。

ヤマザクラや桑の実、ブルーベリー等は赤いうちは未熟で、熟すと黒くなる種類があります。

これらは一斉に熟さず時間差がありますから赤い実と黒い実が樹上に混在する事になりますが、野鳥は熟した黒い実の方を選んで食べています。



野鳥は単純に赤い実だから食べるという訳ではなく、食べられる木の実を熟知していて、種類ごとに食べ頃を見分けていると思います。木の実を赤く色付けている色素はアントシアニンで、もともとは葉に有害な紫外線をカットするフィルターとして植物が持っていた物で、モミジを紅葉させる色素と同じです。冬に向かう植物にとっては既に用済みの老廃物扱いですから、落葉前に葉に集めてしまうのだそうです。赤い実はそれと同じ色素で染められているとなると、安上がりで作られている事になります。栄養価の乏しい果実を染料で目立たせる戦略の様です。

上の写真は泉自然公園のイイギリの赤い実にヒヨドリが群がって啄んでいる場面です。

暫く食べると一斉に飛び去ってしまいます。猛禽類が現れたという訳でもありません。

20分から30分後には群がやって来て再び食べ始めます。

前回見た群とほぼ同数ですから、同じ群が戻ってきたものと思います。こんな事を何度も繰り返していましたが、行ったり来たりはエネルギーの無駄ではないでしょうか

イイギリの立場にすれば樹上に居座って食べ続け、その場で糞をされても種は親木の下に落ちるだけですから、種子散布の役に立ちません。腹いっぱいになったら別の場所へ移動して糞をしてから戻ってもらうのが好都合です。

ヒヨドリがイイギリの都合を忖度するとも思えませんのでイイギリの実に何かの仕掛けがある筈です。

ものの本によれば、キウイフルーツやパイナップルにはタンパク質を分解する酵素が含まれていて、ある程度の量を食べると舌が痛くなって、それ以上食べ続けられなく仕掛けがあるそうです。

さてイイギリの場合はどうなっているのでしょうか。

写真撮影の後、公園のボランティアガイドとしてお客様を案内しましたが、中にノリの良い女性が数人いて何を見せても反応が良く、大喜びするので全体が盛り上がり賑やかな一団になりました。

その一団にヒヨドリの群れを見せようと下見の場所に近づこうとすると、カメラマンが怒っていました。

「せっかく良い場面だったのに前達が騒がしいから、鳥が逃げってしまったじゃあないか」と頭ごなし言うのです。このカメラマンはヒヨドリの習性をご存じ無しのビギナーで、しかも撮影している場所が誰でも自由に立ち入れる公園の通路を塞いでいる自分の立場を忘れていたようでした。デジタルカメラの普及と進歩で手軽に野鳥撮影ができるようになってから時々見かける光景となっています。

無用なトラブルは嫌ですから、「すみません」と言いましたが、心の中では困ったものだと思います。

佐倉市 坂本文雄

憧れのムシ①オニヤンマ／採るのも、撮るのもムズカシィ～

<出会い>

オニヤンマとの最初の出会いは50年以上前の裏山の林道でした。林道沿いの小さな川で手のひらよりも大きいヤゴの抜け殻を見つけたのです。殻が柔らかかったので「近くにいないに違いない」と思い、辺りを見回すと川に沿って大きなトンボが「スーッ」と飛んできたのです。

それから毎日のように網を持って採集を試みましたが採れません。川の流れに沿って行ったり来たりしていて、しかも直線的に飛ぶので採るのは容易いと思っていました。飛ぶコースで待ち伏せをして飛んできたら網を出すのですが、網を「スッ」とかわして何事もなかったように飛んで行くのです。

オニヤンマを手取る日は、思いもよらぬ形でやってきました。母の実家に遊びに行くと、なんとオニヤンマが家の中に飛び込んできたのです。慌てて窓を閉めて袋のネズミにして採ることができました。緑色に輝く目、遅い大きな体、黄色の縞模様を間近に見れてとても興奮しました。これ以来オニヤンマを追いかけています。採集した回数としては、家に飛び込んできたものの方が圧倒的に多いです(笑)

<エピソード>

動体視力、反射神経、体力が衰えた現在は、網をカメラに持ち替えています。オニヤンマを見かけると飛んでいる姿を捕らえようとするのですが、これがなかなか難しく、いつもピンボケの山になります。性懲りもなくオニヤンマにレンズを向けていると飛ぶスピードが遅くなったので確認すると「ニイニゼミ」を抱えていたのです。体が大きいのでセミも捕食対象のようです。

西野 孝法(千葉市)



緑色の輝く目、大きくて遅い体が魅力です



特徴

- ・上向きの目
- ・毛深い体
- ・腹の断面は△

川底の砂に体を隠し、獲物待ち伏せします



羽化直後のオニヤンマ、未だ色がついていません

<エピソードの詳細：オニヤンマのプレゼント？ 2020年8月 千葉市若葉区>

雑木林の中に開けた場所があり、ここに数種類のトンボが集まります。オニヤンマもここに来てスーッと悠然と飛んでいます。急にオニヤンマの飛ぶ速度が遅くなったので「変だな？」と思いよく見ると大きなものを抱えていました。やがて高度を下げて私の目の前に抱えていたものを落としていきました。落としたものを確認すると「ニイニゼミ」でした。



大きなものを抱えて飛ぶオニヤンマ



高度を下げて私に向かって飛んできました



落としたものは「ニイニゼミ」でした

キノコはおいしい！？

キノコの季節ですが、残念ながらキノコの話ではありません。キノコにやって来る虫たちの話です。

8月初めの暑い日、近くの公園に散歩に行きました。暑さのせいか人は少なく、セミの声が天下を取ったように公園に響いています。いつもの公園なのに、どこか「虫の国」に迷い込んだような不思議な感覚にとらわれました。そんなとき、枯れたエノキに、変なものを発見！幹に生えたキクラゲやカワラタケの仲間に「ヒゲモジャの毛」のようなものが沢山ついていました。「う～ん、このひげもじゃキノコは何？」、「キノコの新種？」と触ってみると、中から甲虫の幼虫が何頭か現れ、ますます訳が分からなくなりました。キノコ好きの指導員のNさんに写真を送ると、SNSで専門家の方に聞いてくださいました。「キノコゴミムシダマシの幼虫の糞で、低地なのでアオツヤキノコゴミムシダマシかベニモンキノコゴミムシダマシの可能性が高いでしょう」とのこと。これがキノコを食べる甲虫の「糞」とは驚くばかり！そして、「キノコゴミムシダマシが皮質のキノコ(キクラゲやカワラタケなど)を食べた場合のみ、このような繊維質の糞をし、柔らかいキノコを食べたときはこのような糞はしない」とのことでした。

成虫をぜひ拝まなくてはと、同じ場所へ通うと4～5mmの小さな成虫が、キノコの周りをせわしなく歩いているのを見つけました。ヤッター！教えていただいた2種の甲虫のようです。両種ともオスにはツノのようなものがあり、小さいながらとてもかっこいい甲虫です。そして、ヒゲモジャの糞の中や周囲には他の昆虫も見られ、なかなかの賑わいを見せていました。「同居？」「食う食われる関係？」、暑さを忘れ見入ってしまいました。



キノコゴミムシダマシの糞



アオツヤキノコゴミムシダマシ



ベニモンキノコゴミムシダマシ

よく見かけるキノコを食べる甲虫(これらはヒゲモジャの糞はしない)

ヒメオビオオキノコ(9～13mm) 翅の上と下にオレンジの紋。枯木にはえるカワラタケなどを食べる。

モンキゴミムシダマシ(6mm) 黒い丸っこい体に赤い紋。

キマワリ(16～20mm) 長い脚で朽ち木を歩き回る。朽ち木だけでなくキノコも食べる。

センチコガネ(14～20mm) 糞を食べるが、腐ったキノコにもやってくる。

ナガニジゴミムシダマシ(8～10mm) 名前の通り、虹色に輝きとても美しい。



ヒメオビオオキノコ



モンキゴミムシダマシ



キマワリ



センチコガネ



ナガニジゴミムシダマシ

キノコを食べる虫たちは、胞子を運ぶという大切な仕事をしているそうです。キノコ好きの皆さま、どうぞキノコを食べる虫たちを温かい目で見守ってください。

田島正子 (船橋市)

「五穀豊穡への想い」 高木純一（習志野市）

暦では秋分から寒露に向かう昨今、残暑の夏日が続いていますが、日暮れは早まり、秋聲が聴かれます。この時期になると思い出すのは幼少期に観た赤とんぼの群舞。夕焼空を覆い尽くし、黄金色の田まで赤く染めるかの如き大乱舞。あの風景を観なくなって久しいものがあります。

私が事務局を預かる全国トンボ・市民サミットは 1990 年の創設から 30 年余、あの日本の原風景を取り戻すことが活動趣旨の一つになっています。近年、赤とんぼが全く見られないという地域が全国に広がっています。当サミット創設メンバーの一人、国際トンボ学会会長の井上清氏(大阪市)によれば、赤とんぼが全く観られない地域とまだ観られる地域が斑らに分布しているとのこと。激減している地域は、近畿地方では大阪の大部分、兵庫の中国自動車道以南、奈良の一部、新潟県。一方、長野県の北安曇野郡では余り減っていないそうです。やはり当サミット創設メンバーの一人、NPO 法人ノア代表の新井裕氏(埼玉県寄居町)は、著書「赤とんぼの謎」で減少原因について、棲息地の減少、温暖化の他、水稻箱施薬(苗床で稲苗に農薬を吸わせる)の普及、乾田化の時期を挙げています。

井上氏が調べた赤とんぼの減少地域と新井氏の推論を重ねると、ある事実に行き当たります。それはネオニコチノイドやフィプロニルを主成分とする水稻の育苗箱施用殺虫剤が多用される地域と赤とんぼの減少地域が重なるのです。当サミットの役員である NPO 法人たつの・赤トンボを増やそう会代表の前田清悟氏(兵庫県たつの市)の研究では、ネオニコチノイドやフィプロニルを散布した実験水田では、無処理の水田に比べてアキアカネの羽化個体数が大きく減少することが明らかになっています。これらの薬剤はイネ縞葉枯病のウイルスを媒介するヒメビウンカ、イネの葉身を食害するイネドロオイムシ、イネミズゾウムシ、イネツトムシ(イチモンジセセリ)、ニカメ イチュウによる心枯れ、いもち病を総合的に防除するとして 1997 年頃から農水省により急速に普及されました。

一方で欧州や北米では 2000 年代以降、薬効成分の残留が問題視され使用禁止が広がっています。豊葦原瑞穂国秋津洲(稲穂が豊かに目出度く生茂り蜻蛉が舞う島国)、古来我が国はそう呼ばれ、稲作と共に発展してきました。そして縄文後期から連綿と続く水田稲作の普及に合わせて、その生態を同化させてきた赤とんぼ。五穀豊穡の秋、日本の原風景について想いを巡らせてみませんか？

高木純一（習志野市）

北の国だより

10月1日で、緊急事態宣言も解除されることとなり、北海道でも、自然観察会が再開されます。森の木々はすっかり秋本番となっており、これから、冬へと一気に加速していく勢いです。つかの間の北海道の秋の自然を堪能したいと思います。
(佐野由輝)

北海道で出会った動物たち

緊急事態宣言中であったこともあり、計画されていた自然観察会は全て中止、仕事でも、現場出張の自粛が続いていたため、私にとって、自然と接する数少ない機会は、職場と宿舎との往復でした。とはいえ、ここは、さすが北海道、大都市札幌の中であっても、豊かな自然に接することができます。そんな中で、最近ハマっているのがリーフアート。

先月号の会員の広場でも、リーフアート作品をいくつか紹介しましたが、今回は、私が北海道で出会った動物たちをリーフアートにしてみました。材料としている木の葉っぱは、全て、通勤路周辺で見つけたもので、北海道に自生する樹種です。不器用な私が、老眼をしばしばさせながら葉っぱを切り取った作品ですので、おらかな目で見てくださいね。



エゾシカ (ウリノキ)



タンチョウ (ハリギリ)



ヒグマ (キタコブシ)



エゾリス
(エゾヒョウタンボク)

リーフアートで応援「森林・林業・環境機械展示実演会」

10月10～11日に、第44回全国育樹祭の併催行事の一つとして、森林・林業・環境機械展示実演会が、北海道苫小牧市において開催されます。一昔前に比べると、林業の世界も、機械化が進んできました。そこで、機械展を応援する意味も込めて、様々な林業機械のリーフアート作品を作りましたので、一部を紹介します。なんと、展示会当日に、このリーフアート作品も披露されることとなりました。いつか、自然観察ちばの皆さんにも、実物を見ていただきたいですね。



ハーベスタ (カツラ)



フォワーダ (キタコブシ)



グラップル
(ケヤマハンノキ)



タワーヤーダ
(ホオノキ)